
モドリー・ルーゼ

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モドリー・ルーズ

【Nコード】

N3371Y

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

ここにあつて、どこにもない・・・世界の森『ニケ』のポルチニーク：ジュンのお話。

1 赤いワーマ

・・・。

朝か。

何回か瞬きして時計を見る。

6：24

まあ、良い時間だ。

私の起きる時間は6：00～7：00の間。

よしっ、顔を洗いに行くか。

私はベッドから降り立ち、

タオルを持って外へ向かった。

森の朝は静かだと思っだろう。

静かなんだ。普通の人にとっては。

だけど、私にはそうだな、あえて言うなら・・・

「ちょっと、ジュン。寝癖がひどいわよ」

「ジューン。飯くれー」

「東のはずれは危険だ」

うん。喻えようがないな。

ちなみに、最初のおばちゃんみたいなのが

ポプラの木のモリー

次が狐のジムベルト。

最後が鷹のヴォルクス・ウォリング。

私？私はこの二ヶの森のポルチニーク、ジュンだ。

「あーはいはい。顔洗うから邪魔」

足に纏わりついてくるジムベルトを蹴り

ワーファが咲く小さな小道を歩いて泉に向かう。

泉の底から滾々と湧き出る水は

透き通っていて、とてもキレイだ。

その泉の水を両の手で掬う。

口に運んでそつと飲んだ。

冷たい。今日も私を生かしてくれる水。

何回か顔を洗うと頭がすっきりした。

「ふー。あ、ヴォルクス。さっきなんか言ってたよね？」

タオルで顔を拭きながら背後の木に止まっている鷹に尋ねる。

「東のはずれが危ない」

少しかすれた声でヴォルクスが答えた。

「・・・東？」

「ああ、土が死に始めている。ワーファが赤に変わっていた」

「それ、赤薔薇の仕業だぞ、ジュン」

左の木々の間から第三者の声がした。

「ベル、おはよう」

「短縮するな。ベルノーストだ」

白い毛並みに黒の縞模様。

耳は三角で少し大きくて、

青銀のピアスが左耳についてる。

尻尾は馬のようにフツサフサ。

つまり、でかいネコ。いや、トラ？

「なんで東で赤薔薇？東ってビリーリイじゃん」

「何でも、その幼い王子に呪いがかかっているらしいぞ」

「聞いたことがある。忌み王子って噂だ」

「・・・ヴォルクス、お前ビリーリイまで飛んでんの？」

「趣味だ」

あつそ。私はベルに顔を向けた。

「それで、王子の呪いに赤薔薇が一枚噛んでるってこと？」

「そういうことだな」

「あー、長サボリすぎたかなー」

「ってか、今の赤薔薇誰だよ、もう」

面倒くさいことこの上ない。

「それで、今日はどうするんだ」

尻尾をパタパタ振るベルに向かって言う。

「もちろん、ビイーリイまで!」

「えーっと、ビイーリイに行くには・・・」

「おい、まさか力の使い方を忘れたなんていわないだろうな?」

「ベル。まかせろ」

（任せたくねえ・・・）

とあるトラの憂鬱。

2 忌み王子

とある国に、仲睦ましい国王夫妻がいた。

待望の男の子を授かり、祝宴に二ヶの薔薇の魔法使いも呼ばれた。

しかし、青薔薇の魔法使いだけがどこにいるか分からず、招待状を渡せずじまいだった。

美味しいご馳走に、素晴らしい余興に、

大満足した薔薇の魔法使いは一人ずつ贈り物をする。

翠薔薇は智慧を

紫薔薇は勇気を

黄薔薇は誠実を

橙薔薇は正義を

しかし、赤薔薇の魔法使いだけは違った。

「私のお皿だけ欠けていたわ。だから王子には呪いを」

それは、あらゆる災厄を身に纏ってしまふものだった。

そして、それがもとで王子は二十歳の誕生日で死ぬと。

赤薔薇は笑いながら城を去った。

しかし、まだ贈り物をしていない魔法使いが二人いた。

「私は赤薔薇の呪いは完全になくすことは出来ない。

だけど、王子の呪いを解く女性が現れることを願って」

白薔薇は愛情を贈った。

「では、私はこの王子が少しでも生きやすいように」

黒薔薇は眠っている王子に節制の懐中時計を贈った。

王は、騎士たちに命じた。

王子の呪いを解いてもらうために青薔薇を探せ、と。

しかし、どこを探しても青薔薇は見つからなかった。

「ふう」

ため息をついて懐中時計をパチンと閉じる。

誰もが知っているこの国の話。

御伽噺でも何でも無い、本当の出来事。

青薔薇は未だ見つからず。

「いつか、だれか、この俺を助けてくれるのか？」

自嘲ぎみに笑う王子はまだ、呪われている。

庭園の真っ赤な薔薇が風で揺れていた。

3 お茶の時間

「ルカーシュ様、お茶でございます」

ルカーシュは、大きな窓の前に設えてある猫足ソファで本を読んでいた。

「本日のお茶は、南のナユフ特産のクアジーで淹れた紅茶と、ヤームの絞りたてミルクで作ったクリームロールケーキでございます」

「・・・毎度毎度、お前の三時のおやつは凝っているな」

「ルカーシュ様に喜んでいただきたい一心で準備いたしました」

ルカーシュは、本から顔を上げハロルドの顔を見た。

出会ってからずっと変わらない見事な白髪と、髪と同じ白い口髭。今は好々爺然とした微笑みを浮かべている。

ハロルドの顔って落ち着くな、と思いながら本に鳥の羽葉を挟み、上体を起こした。

「では、自慢の品を頂こうか」

暖かい午後の時間が過ぎていく。

「着いた!!」

「・・・やつとだな」

ジユンとベルノーストは東の国、ビーリイの城下の薄暗い路地裏にいた。

「いやー、久しぶりに魔法使ったらお腹空いちゃったよー」

ジユンはアハハーと笑いながらお腹をさする。

（久しぶりすぎて、この国に辿り着く前にいくつの国に飛んだと思っただ）

移動魔法の余波をもろにくらって気分が悪いベルノーストは、ぴんぴんしているジユンを睨んだ。

「今。何時だろ?・・・三時のお菓子の時間っ!?!なるほど、糖分が足りなかったから上手いかなかったんだなー」

（移転地点のスペル間違っただけだろ）

おかげで、この世界の似たような名前の地名を制覇した。
・・・時には家畜に追いかけれながら。

「あ、ベル。思いついたんだけどさー」

「何だ?」

ベルノーストは胡乱な顔（毛で分らないが）をジュンに向けた。

「お金ないやー」

「てめえ食うぞっ」

ベルノーストの本能が目覚めたかもしれない。

「今日の茶と菓子も実に美味しかった」

「準備した甲斐がありました」

ルカーシュはカップをテーブルに戻した。

「ところでハロルド、マークは？」

いつもつかず離れず、ルカーシュを護衛しているマークの姿が見えない。

「マークは今、城下で私が頼んだ買い物しております。昼食の後に頼んだのでそろそろ帰ってくるでしょう」

「そうか、あいつがいないのが珍しくてな」

「その代わり、この老いぼれで我慢してください」

ハロルドが胸に手を当てて頭を下げた。

「ふ……。頼りにしている」

ルカーシュは窓から見える城下の町並みを見下ろしながら、買い物をしている友人を思った。

「お前、肉食だったっけ？」

「今ならお前を食う為に理を犯せそう気がする」

路地裏の珍事。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371y/>

モドリー・ルーゼ

2011年11月17日20時20分発行